

総合保育園の活動の一部、森の保育園

木下イサ子

一週間同じメンバーで

デンマークには、ユニークな「森の保育園」というところがある。何種類かあるようで、保育園の施設そのものが森の入り口あたりにあって親御さんがそこまで送っていき、そこを基点として森に行って活動する！！というスタイルと総合保育園(乳児から就学まで)の中の一部として森へ行き活動するというスタイルの保育園があるようだ。

私たちがたずねた森の保育園は、後者の方である。朝、総合保育園に親御さんに送ってもらい、そこから園バスに乗って森の保育園まで行く。1週間交代で、1週間は同じメンバーで森の保育園へ行く。



<拠点として借りている民家>

萱葺き屋根の小人のおうち

バスの終点になっているところに古いかやぶき屋根の民家があり、そこを借り受けて子どもたちが森の保育園へ行く拠点となっていた。うっそうと茂った木々の中に立つ平屋のかやぶき屋根の家は、おとぎばなしそのもので、そこに群れる子ども達はまるで小人のように見えた。まき割りをしたり、木から

ぶらさげた長いブランコに乗ったり、ターザンをしたり、見学者が大勢いるので幾分憶面しているように見えた子どももいたが、皆自然の中で無邪気そのもの、目鼻がくっきりして美男・美女の子どもたちの笑顔に真っ白な歯がなんともかわいらしかった。

やがて早めのお弁当を年季の入った古めかしい野外テーブルで丸くなって食べる。皆のお弁当の中身は、チーズやハムをはさんだ黒パンときゅうりや人参、パプリカを大胆に切ったものと、とても簡単だった。太いきゅうりや人参に大きな口でかぶりついていて。お弁当づくりにこる日本人のママ達は少しびっくりするだろう・・・と思いながら見ていた。

木の実を食べながらの散歩

やがて1列に並んで出発する山道を子ども達は難なくどんどん進む。日ごろの山での活躍ぶりを皆に見てもらいたそうに。約束事があり、途中何箇所かある待ち合わせ場所では必ず待っていることで、そこで保育士は、自然に人数確認をしていた。

登る道々珍しい木いちごや、草いちごなどがたくさんなっていた。(デンマークはこの森に限らずどこにも、ここにもリンゴや自生する桃が街中、森中にあふれるようになっていて、野生の私にはそれだけでも充分生きていけそうに感じた)

子ども達は木の実やいちごはめずらしがらないが「あっ、すご~い」とさわぐ私たちに(特に私)「これはたべられるんだよ」とデンマーク語で教えてくれたり、食べて見せ

てくれたり、つんでくれたり、これは毒キノコだから気をつけろと教えてくれたり、とてもやさしかった。

こんもりと一面に実っているいちごや木の実を食べたり、写真を撮るのに忙しい私を「そんなに待ってあげられない・・・」とどんどん進んでいく子どもたちを、必死に追いかける・・・こと20分くらい?・・・か?

巨木の群れやワニの谷で

やがて平らな山の頂に出る。そこで目にしたのは樹齢何千年もの大木。巨木の群れ!! 日本だったら神様の木として白い和紙の「祝詞」がかけられ、祀られているだろうと思う大木の群生地。大木は自然のままに置かれ、枝分かれして倒れたり、一部が枯れたり、腐り始めたりしてまるで大きな岩山のようになったりしていた。

大木の木の葉は、その山の頂上に降り積もり柔らかい土じゅうたんになっていて、歩くとしずむ感じになっていた。そこに牛も放牧されるらしく、ところどころに牛のフンもあって、牛フンも浄化されはじめていた。その山は誰か個人のもので、そこを国が借り上げて毎日子どもたちに提供している。まさに「森の保育園」なのである。

そこに着くと直ぐに子ども達は倒れた大木でできた岩山?に登ったり、その大木の岩を足場にして生きている大きな木に登ったりしていた。指導員は決して手伝うことはせず、子ども達は自分たちの力で、登れるところまでは登る。降りるのも自分の力で降りる。デンマークの人たちは自分の生活は自分で、人に依存することは好まず自立した生活を送る国と言われているが、人生の最初の保育の場でも、あらゆる場面で徹底されている。徹底しているのではなく、おそらく、自然発生的にそうなっているのだと思う。ここでもひと育ちの原点を見たような気がする。

大木の群生地から通称「ワニの谷」(大きくなくぼみができているところをダダダと

駆け下りたり、駆けのぼってたりして遊び、子ども達はそう呼んでいた)を抜けてやがて、遠くの方まで見渡せる見晴らしの良い場所に出る。どこまでも続く緑の丘陵地帯と遠くの街並みが眺められる、そこに立ち日本の9月の陽気というデンマークのさわやかな風がなんとも気持ちよく心に伝わりました。



<ブナの巨木に登って遊ぶ>

休息と遊び

その見晴らしの良い所からかなりの急斜面をトントントン、ダダダ・・・と下まで一気に駆け降り、白樺林と芝生の上でしばし休息と遊び。ゆっくりと平らな山道を小人さんの家まで戻りましたが、途中で日本のオリーブに似た紫色の木の实がたくさんあり指導員が「食べてみなさい!!」と言いながら苦笑いをしている!!好奇心ならぬ?食欲旺盛?な私は素直にかじってみる。ものすごくいまずさにペエーと出してしまう。

お酒などに漬け込むと日本語で言う高級な○○酒が出来ると言っておられました。その木の实の小枝2本を記念に貰って帰り、今私のテーブルの上でドライフラワーになって、ダイナミックな森の保育園の思い出を鮮明にしています。

HPIはひの社会教育センター 検索で